

「日本語・日本事情」参観から学んだこと

日本語教師としての資質

信州大学人文学部4年 酒巻 愛（日本語教育学専攻）

日本語・日本事情の授業見学では、私の場合、日本語は上條先生の授業を、そして日本事情は村田先生の授業を見学させていただく機会を得た。二つの授業は、「日本語Ⅰ」は読解中心であり、「日本事情」は文化理解を中心としているものであったが、どちらにおいても先生自らが授業を計画し、教材を選択し、工夫を重ねた授業を行っているという点では共通していたと思う。

日本語の授業では先生が準備した教科書を読み進めていくということが授業の中心であった。授業の際は多くの語句を説明する機会があったが、例文を使って正しい語句の意味を把握させるという方法もあれば、辞書記述の内容に不足がある場合は先生自らが意味分析を行って説明する場面もあった。また、述語の説明についてもそれぞれの漢字の意味にまで分解して説明する場面なども見られた。また、学生に質問をする際には、学生のレベルに応じて質問の難易度を変える必要もあるということであったが、そのようなことを常に行うわけではなく、状況に応じて学生のやる気をなくさないように質問に配慮するのも必要であるということであった。日本語教育学という専攻において、音声学や語史、意味分析の方法など日本語の専門的な知識を学び、それがどう日本語教育と関係しているのかということが理解できずにいたのだが、実際に授業を行う際にはそのような専門的な知識の一つ一つを総合的に関連させながら授業を展開するということがよく理解できた。さらに、日本語の専門家であると同時に、教育者として学生一人一人の状況をきちんと把握し、それぞれに応じた対応ができるような柔軟性も求められているのだと感じた。

今回見学させていただいた村田先生の日本事情の授業は、毎回テーマに沿ったビデオを見て、最後にその内容についてのテストを実施するというものであった。授業で使用しているビデオは先生がテレビ番組などを録画したものが主であるが、もともとは日本人向けに作られている番組であるために、どの番組も授業で使用できる難易度であるとは限らないので、さまざまなビデオの中から何を選択し、どの部分を使用するかという点は細心の注意を払う必要があるということであった。授業ではビデオの内容を文字化したハンドアウトを使用し、学生はそのハン

ドアウトを見ながらビデオを見るという流れであった。ビデオの内容は日本の文化が中心であったが、災害や科学技術など多岐に亘っていた。その理由としては、講義を受講している学生が工学部や理学部などの理系の学生も多いということから、様々な学生が興味を持てるように考慮しているということであった。授業を見学させていただく際に、何か自分でもできることはないかと提案し、授業で行うテストを作らせていただくという機会を得ることができた。そのテストでは始めに語句を聞き取る穴埋め問題を行い、それからビデオの内容を問う設問を行うというものであった。テストを作成するにあたっては、あらかじめ先生が文字化してくださったハンドアウトと、ビデオを貸していただいた。語句の聞き取り問題はあまり難しくなく、しかも日本語として今後の講義等を受ける際に知っていて欲しいもの、という注意を払って考えていらっしやるということであった。たくさんいる学生の中で、どのくらいに難易度をあわせればよいのかなど、大学の講義を受けることができるレベルというものを考えることは初めてのことで、たいへん難しいものであった。また、ビデオの内容は各番組によって様々だが、ナレーションなどについても様々であった。話すということを専門に行っているアナウンサーがナレーションする場合は問題ないと感じたが、俳優などがナレーションを行う場合はその人独特の話し方やイントネーション、また聞き取り易さなどに違いがあり、ハンドアウトなしでは理解する事が難しいのではないかと思った。したがって、語句の聞き取り問題や、内容理解の設問などでもナレーションを担当する人物と聞き取りの難易度という点に注意してテストを作成するよう心掛けた。さらに内容理解の設問では、登場人物、または登場する団体等が何を行ったかという主語と述語に焦点をあて、多くの情報の中から正しく読み取ることができるかという点に注意するよう心掛けた。テストを作らせていただくという経験は、学習者の理解度を直接感じ取ることができるよい機会であったと思うが、教える対象としての日本語を客観的に見る必要があるとされる教師の力量を、肌で感じるたいへん貴重な経験であったと思う。

授業見学から得たもの

信州大学人文学部 4年 佐藤智佳子（日本語教育学専攻）

上條厚先生の「日本語Ⅰ」と「日本事情」の授業を短期間ではあるが、見学させていただいた。留学生センターでのプロジェクトワークには参加させていただいたことはあるが、授業形式の日本語教育が行われている現場を見ることは初めてであったため、貴重な時間となった。授業を見学させていただいて、感じたことは様々であるが、主に三点について述べていきたい。

まず一点目としては、複雑な日本語の構造をどうやって教えたらいのかとい

う点である。日本語学習者にとって、習得が困難だと考えられるのが文法や語彙の問題であると考えられる。意思の表現や思考内容を文字によって伝達することから、文字の指導も日本語教育において、重要視される。学習者にとって、特に困難だと考えられるのが漢字である。学習者の出身が漢字圏か非漢字圏かという違いも考慮しなければならないが、日本語には日本人でも間違えてしまう漢字や表現、多様な読みを持つ漢字がある。複雑な日本語に対して、苦手意識を取り払い、学習者に理解しやすい授業を心がける必要がある。

二点目としては、意味を説明する難しさ、理解させる難しさである。意味を説明する際、その語の意味を説明するだけでなく、説明したい意味に関連付けていき、徐々に核心に近づく説明の仕方を展開していくことが、より分かりやすい説明の仕方だと感じた。また、説明をする際、分かりやすい例を使って説明するというだけではなく、その状態やありさま、状況を仮定しての心情などを想像させ意味を説明することが学習者にとっては理解しやすいだろう。

三点目としては、いかに学習者に興味を持たせるかという点である。例えば時事問題を扱う際、問題を自分の身近に感じさせることで、より関心を持つのではないだろうか。そのためには、学習者と同じ視点に立ち、学習者の身になって考えることが必要である。また、何よりも幅広い知識が必要であると感じた。

日本語を学ぼうとする学生の国籍は多様であり、日本語の習得レベルも様々である。授業は、上級者向けであったためか、私の考えていた日本語教育とは違い国語教育に近いような印象を受けたが、実際に日本語教育の現場を見ることができたことで、日本語教育について考える貴重な体験になった。ご指導いただいた上條先生には、心から感謝申し上げたい。

参観実習から学んだこと

信州大学人文学部4年 田口愛葉（日本語教育学専攻）

日本語教育実習の一つとして、上條厚教官の授業を参観させていただいた。「日本語」は読解中心の授業であり、「日本事情」の方は歴史や文化の解説を中心にした、自然環境や人間についての授業であった。会話中心の授業とは異なり、教師が講義形式で進め、対象も予備教育を終えた上級の学習者であった。

「日本事情」という題目の授業の参観は、今回が初めてであったが、視聴覚教材の有効さを実感した。語彙の導入や会話練習の際に用いられる補助教材とは異なり、ここで用いられた補助教材は、日本語の歴史的な語句の理解を助け、日本文化の理解をより深めるための助けともなる。これは、解説のみで講義を進めるより効果的である。さらには授業が単調になるのを防ぐことにもなり、参観を通して視聴覚的教材の有効さとその使い方学んだ。

日本語教師にとって、日本語の知識もさることながら、日本文化についての深い理解と豊富な知識は欠かせない。「日本事情」の授業はもちろんのこと、「日本語」の授業でも日本文化の知識を導入しながら教授することが必要となる。学習者の母語や文化に対する知識も必要となるが、まずは自文化に対する深い理解と豊富な知識を備えていることが非常に大事である。

今回参観させていただいた授業の学習者は、国籍や母語、学習歴においても幅広いものであり、漢字圏の学習者もいれば非漢字圏の学習者もあり、多様であった。それぞれの学習者によって細かいニーズの違いはあるにしろ、「日本語で勉強するための日本語を身につける」という点では共通している。予備教育としての日本語教育ではなく、今回のような上級の学習者を対象とした授業を参観させていただいたことは非常に貴重な経験であった。

参観実習を振り返って

信州大学人文学部4年 中島葉子（日本語教育学専攻）

テキスト本文は、日本で暮らすようになって日の浅い学習者にとっては興味を持ちやすい内容ではないかと思った。日本人の感覚を知る良い資料となる内容であったためである。学習の効果を上げるために、一度ふり仮名をつけた漢字には次に板書するときからはつけない、などの配慮がされていた。

漢字テストもおこなわれ、中国語母語話者に特有の誤りやすい箇所を、その都度注意するよう指導がなされていた。学習者の母語についてその特徴を知り、日本語を第二言語として習得する際に障害となる点を、学習者に合わせてその都度知っておく必要性を感じた。

日本事情の授業では、日本の歴史について扱っていった。学習者が発言するという機会は少なく、視覚的教材を用いながら説明中心で授業が進められていた。しかし、ポイントごとに学習者に考えさせる発問があった。

学習者には欠かせない学習内容でありながら、すべての学習者の興味を強くひきつけるとは言いがたい状況において、いかに学習者に自ら考えさせる方向に持っていくかという指導上の問題があるが、写真やビデオなどの視覚的な教材は、学習者に興味を持たせるためには重要なものではないだろうか。こういった日本文化の背景を定着させることは、日本語能力の向上に欠かせないであろうが、「学習者を引きつけるということ」と「教えるべき内容を盛り込むこと」を両立するためには工夫が必要であろう。

学習者の日本語能力に差がある場合は、スピーチコントロールから教材選びまで、気を配るべき問題は多い。このとき、学習者の満足感を満たすためにも、ある程度学習者が答えられる質問をする場合も必要であるということ考慮に入れ

なければならず、あらためて考慮すべき問題の多様さを再認識した。

「日本事情」の授業では、学習者同士が授業時間内に私語をする場面も見られた。これは、上條先生も細かく指導をしていたように、学生のマナーを直すべく指導していく必要があると思う。放っておけば、その態度で授業に臨んだり人の話を聞く習慣が直らないであろう。また一方では積極的に先生の話に集中している学生もあり、そういった学生の学習を妨害しないためにも、教師が指導性と主体性を確立し、学生の日本語能力に必要な内容を確実に取り扱えるような教室運営が必要になってくるのではないだろうか。

最後に、この貴重な機会を提供して下さった上條厚先生、沖裕子先生に感謝いたします。ありがとうございました。

『日本語』・『日本事情』の授業参観を振り返って

信州大学人文学部4年 向出真理子（日本語教育学専攻）

4月から約三ヶ月間人文学部の「日本語教育実習」の授業で木村宗男氏の「日本語教授法—研究と実践—」を講読し、日本語教育および教授法の理論を学んだ。その上で、上條厚先生による高等教育センターでの「日本語」と「日本事情」の授業を見学させていただき、木村（2000）の理論が実際の授業でどのように展開されているのかを学ぶことができた。

木村（2000）は視聴覚教材を取り入れた教授法について触れている。視聴覚教材は実物・写真・絵などがあげられるが、直説法による授業で新出語の意味を教える際に学習者の理解を助けるものとして多用される。「日本事情」の授業においても、日本地図や土器などの写真、ビデオが1時間の授業の中で3～5回用いられていた。ビデオは留学生用教材として製作されたものではなく、テレビで放送されたものであったため、先生はビデオの後に補足説明をおこなうなどして学習者の理解を助けていた。また、説明したものの写真を提示したり、二枚の写真を並べてその違いについて学生に質問したりと、資料の出し方も工夫され、視聴覚教材は学習者の関心を高める役割もはたしていた。

次に漢字の学習について述べる。「日本事情」の授業では板書にふりがながやや多くつけられていた。「日本語」の授業では教材に出てきた漢字について、その歴史的背景についても説明されていた。また授業の最初に漢字テストがあった。この漢字テストは毎回おこなわれているとのことである。非漢字圏出身の学習者にとっては漢字学習および定着をはかる機会になっており、大半を占める中国人学生に対しては字形の違いなどについて注意を促がしていた。

二つの授業に共通して、先生が話すスピードやことば遣いは自然なものであった。先生は「できるだけ自然で、しかもあまり難しくないように」を意識され、

またある程度難しい語句も易しい語句に置き換えながら使用するようになっている、とのことだった。このように学習者の日本語能力や、その場その場での学習者の様子を見ながらスピーチコントロールをすることで学習者の理解を助け、同時に学習者の日本語能力を高めることにつながるということを学んだ。

授業の後、授業で疑問に思ったことや先生が意図したことなどについてもお答えいただいた。授業参観に加え、事前・事後指導によっても日本語教育の現場について理解を深めることができ、学ぶことが多かった。3週間にわたっての授業参観をご快諾いただいた上條先生に感謝申し上げたい。

【参考文献】

木村宗男（2000）『日本語教授法—研究と実践—』凡人社